

清水 導臣 氏の学位審査結果の要旨

主査：鎌方 安行

副査：上野 博夫、蔦 幸治

播種性血管内凝固(DIC)は敗血症の主要な死因の一つであり、なかでも血小板数減少は予後不良を予測する重要な因子として知られる。しかし敗血症性 DIC に係る血小板活性化の意義については、いまだ知見が乏しい。清水氏は、敗血症および造血器腫瘍症例の DIC 診断時・治療経過中の各種バイオマーカーを測定し、これを DIC 非合併敗血症例、健常者と比較検討する臨床研究および *in vitro* 検討を通じて以下の新知見を得た。敗血症性 DIC 症例では、血中での各種炎症性メディエータや可溶性接着分子が健常者より有意に高値を示し、なかでも interleukin(IL)-6、thrombopoietin (TPO)、および血小板活性化指標の platelet-derived microparticle(PDMP)、soluble P(sP)-selectin は、造血器腫瘍 DIC に比しても敗血症性 DIC において有意に高値を示すことを見いだした。さらに *in vitro* の血小板活性化試験において、IL-6 と TPO 添加が血小板活性化を促進することを確認した。以上より、血中 PDMP、sP-selectin、IL-6、TPO は敗血症性 DIC の疾患重篤度をあらわす指標となりうることが推測された。とりわけ他病態 DIC と比べ、有意な血小板活性化の存在を見いだしたことは、新たな敗血症性 DIC 例予後予測法につながる可能性を示唆しており、十分に学位に値すると判断された。